

イタリア方言研究のために

菅田 茂 昭

1. はじめに

イタリアは、ローマのなかで領土の割りに方言分化の著しい国である。この地には、すでに前ローマ時代数多くの人種が居住して、その住民の気質や習慣に地域差を生ずる要因となったが、さらに地形的条件もこれを助長してきた。すなわち半島のつけ根をなすアルプス山脈は、外側から明るい太陽と温暖な気候の内側への通過を容易にする構えをなし、またアペニン山脈とその支脈が形成する丘陵は全土を孤立した地域へと細分している。他のロマンス諸言語や諸方言の場合と同じく、イタリア語あるいはイタリア諸方言もテヴェレ川河口のラティウム地方の一俚語にすぎなかったラテン語が、その首都ローマの政治的発展とともに、各地に拡まったところからはじまる。「すべての道はローマに通ずる」といわれた道路網のうえに求心力を保ったラテン語が、ローマ帝国がしだいに崩壊への途をたどりはじめると、広大な地域に言語的統一を維持することが困難となり、徐々に各地域の遠心力により分化し、独立の変化をうけて生じたものである。本稿では、イタリア諸方言の成立について、かつて R. A. Hall Jr. が試みたように、共通原ロマンス語（あるいは俗ラテン語）からまず原南ロマンス語（サルジニア語）が原中央ロマンス語と分化して独立し、この原中央ロマンス語から原東ロマンス語と原イタロ・西ロマンス語が分かれ、この原イタロ・西ロマンス語が原西ロマンス語（原イペロ・ロマンス語と原ガロ・ロマンス語へと分かれる）を残して原イタロ・ロマンス語となり、イタリア諸方言へと発展するといった図式で捉えようとする年代的に未解決の問題（cfr. Devoto, *Profilo* P.11）や、基層言語の問題は直接の対象とすることは差し控えて、現在のイタリアにはいかなる方言区分が可能か、そしてそれらの諸方言はいかなる特徴によってたがいに区別されうるかという問題を整理してみたい。

2. イタリア方言研究の経緯

本論に入るまえに、このテーマがこれまでいかに取り扱われてきたかを簡単に述べておきたい。

方言の多様さを論じた最初の学者は、Dante Alighieriであった。しかしそれはローマニアの他の地域同様、当時知識階級だけの共通の書きことばであったラテン語に対して民衆語としての国語を探索する過程においてであった。地域ごとに異なる民衆語を前に *De vulgari eloquentia* は、これら諸方言の特色を捉え、その詩的価値を検討するが、目標はそのなかから *volgare illustre* を選択することにあった。方言に対するこのような観点は、A. Manzoni の言語問題を経て、「国語はある方言から生まれる」といった G. Bertoni の *Profilo* の書き出しのことばともなるような定式化にいたるが、「国語と方言」関係という図式においてこんにちまで受け継がれている。それは書きことばの言語統一を維持する求心力と、逆に民衆の話しことばの地域的分化への遠心力との均衡のうえに成立する関係である。

方言に対するこのような接近法に対して、元来「言語は地域社会ごとに異なるものである」という原理にもとづいて、方言研究をみだす接近法も存在する。本稿でとり上げようとしている、この方法でイタリア諸方言の科学的な分析を試みたのは G. I. Ascoli が初めてであ

った。みずから創刊してイタリア言語学の基礎を築いた *Archivio Glottologico Italiano* の第8巻(1882)に載せた *L' Italia dialettale* と題する論文(*Encyclopaedia Britannica* のため1880年夏に執筆)においてである。彼はまず英語方言がケルト系のゲール語、スコットランド語、ウェールズ語と、あるいはフランスの方言がブルトン語やバスク語といったように別系の言語と接触し対照をなすのと異なり、イタリアの諸方言はスラヴ、ギリシャ系などの移民地区を含むとはいえ、同じネオ・ラテン語系の間の対照にとどまること、しかしながらその諸方言間の対照の度合は極だつて大きいことを指摘して、要約すればトスカナ性を規準に次の四つのグループに大別している。

A. イタリアとは異質のネオ・ラテン語に属する方言。

1. フランコ・プロヴァンサル方言
2. ラディン語

B. 本来のイタリア語(トスカーナ方言)から分離するが、イタリアとは異質のネオ・ラテン語とはならない方言。

1. ガロ・イタリア方言
2. サルジニア方言

C. 純粋のイタリア語(トスカーナ方言)型から多少離れるものの、トスカーナ方言とともに一つのネオ・ラテン語を形成する方言。

1. ヴェネツィア方言
2. コルシカ方言
3. シチリアおよびナポリ方言
4. ウンブリア、マルケ、ローマ方言

D. イタリア人の文学語としてのトスカーナ方言。

この先駆者の分類の誤りは、のちに C. Merlo が、やはりみずから創刊した *L' Italia dialettale* (1924) のなかで *Ascoli* と同様の題名の論文を掲げて、批判・修正するところとなった。彼は *Ascoli* の四つのグループ分けを継承するが、Aグループからはラディン語を、Bグループからはサルジニア語を、Cグループからはコルシカ方言を独立させて、これらをイタリア方言の外に置くほか、Aグループにこんにちでは死語と化したヴェリオート語を加えることを述べ、Bグループにはガロ・イタリア方言との共通性を示すヴェネツィア方言を組み入れてこれを北イタリア方言とする。Cグループは中・南イタリア方言とされ、Dグループに関しては異論の余地はないというのが Merlo の見解であった。イタリア方言研究のこの方向は、のちに K. Jaberg - J. Jud の *Sprach- und Sachatlas italiens uod der Südschweiz* (通称= AIS = *Atlante italo-svizzero*) を中心とする言語地理学によって精密化され、その膨大な調査資料は項目ごとに地理的分布の複雑さを示すこととなるが、Merlo の方言分類の正当性を概略裏付けることにも貢献している。こんにち多くの学者が一致するイタリア方言の三大区分は Merlo にさかのぼるといってよい。以上のようにイタリアにおける方言に対する関心は Dante いらいのものであり、また近代言語学も *Ascoli* の方言研究から始まっていること、さらに最近では新しい言語地図の刊行が待たれているのはもちろん、各地域ごとの綿密な方言研究が盛んに進行中であり、方言研究に新しい局面が到来したともいえる。一方イタリアにおける方言の根強さは、いわゆる標準イタリア語が方言と現実の日常生活のなかでどのような繋がりをもつかという問題を改めて考えさせずにはおかないという現状である (*L'italiano regionale* に関する

一連の論文にみられるように)。

3. イタリア諸方言とその特徴

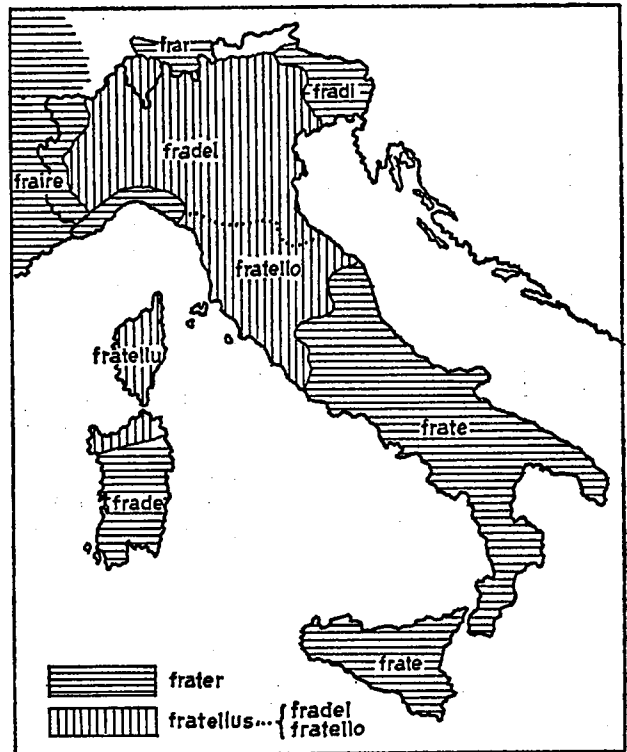
ここにちイタリア諸方言について論ずるための原資料をなしているのが、K. Jaberg-J. Jud による AIS である。これに G. Bottiglione による Corsica が加わる。計画中の *Atlante Linguistico italiano* はその *Bollettino* の刊行にもかかわらず資料の仲間入りが待たれるに過ぎない。

さて AIS は、1928 年から 1940 にかけて刊行されたもので、8 巻からなるが、その後 index その他が追加されている。採収には 3 人の学者、すなわち南スイス・北および中部イタリアは P. Scheuermeier が、南イタリアには G. Rohlfs が、そしてサルジニアには M. C. Wagner が当たり、全領域の約 400 地点において概念(および表現)別に調査した 1703 枚の地図からなる。各地図は、音形、語形(および表現)の地域別差異を浮彫りにした見取図となっている。

イタリア方言区分への最初の重要な手がかりは、AIS の調査にも加わった G. Rohlfs が選ぶ「兄弟」を表わす単語(AIS Karte 13)であろう。

この地図はラテン語の *frater* タイプとロマンス語における改新を反映する *fratellus* タイプによって 2 分されている。南イタリアとサルジニアが古い形を保っている。コルシカはトスカーナに組みする。北イタリアには *fratellus* タイプが普及し、古い形を周辺に留めている状態が、リグリア *fre*, 西ピエモンテ *fraire*, グリゾン *frar* (*frer*), フリウリ *fraté* などから読みとれる

(cfr. M. Bartoli, *Introduzione*, P.6~9.)。重要なことは、*fratellus* タイプの地域が、トスカーナの *fratello* と、北イタリアの *-t* を有声化した *fradel* とに分かれることである。この境界線はイタリア方言区分においてもっとも有標的なもので、一般に La Spezia-Rimini ラインと呼ばれている。音のレベルでは、いわゆるガロ・イタリア現象がこの線まで延びている。母音間の無声閉鎖音の有声化：p. es. *fradel* <<fratello>> 兄弟, *formiga* <<formica>> 蟻；重子音の単子音化：p. es. *spala* <<spalla>> 肩, *gata* <<gatta>> 雌猫；語末母音の脱落：p. es. *an* <<anno>> 年,



(G. Rohlfs, *studi e ricerche*, P.7より)

sal <<sale>>塩; アクセントのない音節の消失: p.es. tlar <<telaio>>枠; 鼻音に先行する音節末母音の鼻母音化: p.es. pã, pang <<pane>>パン。これらの等語線がもっとも接近し合うのはエミリアとトスカーナを分かちアペニン山脈の分水嶺においてである。これは自然的条件の反映であるが、古くはゴール人とエトルスク人との人種的境界線であり、また何世紀にもわたってラヴェンナ大司教管区とローマ大司教管区との境界であったこととも一致していることが注目される。次に重要な等語線の束——こんどは束の幅が広域にわたるが——があってトスカーナを中・南イタリアと分ける境界線、むしろ境界領域といったものを形成する。Ancona周辺からアペニン山脈を越えてFolignoとRietiとの間を通過してCastelli (Colli Albani) にいたる地域であり、かつてのスポレート公国の最北線にほぼ沿っており、ロンゴバルド時代にはこのベルト地帯によってスポレート公国はトスカーナと区切られ、またローマ教皇はSan PietroとRavennaを結んでいたのである。このようにトスカーナから南イタリアへの自然の連続体は、ウンブリア州によって方言的に中断されるのである。この地域まで南イタリア方言のさまざまな特徴が北上している。鼻音に後続する無声子音の有声化: p.es. mondone <<montone>>牡羊, angora <<ancora>>まだ; 語末母音の影響でアクセントをもつ母音のメタフォニー: p.es. denti <<denti>>歯, acitu <<aceto>>酢; その他: p.es. figliomo <<mio figlio>>わが息子, frate <<fratello>>兄弟, tenere <<avere>>持つ。しかしながら、ときには北イタリアの現象としての語彙 adesso (今) が、トスカーナで用いられる ora (今) を孤立させて、マルケ、ウンブリアを経てローマまで南下したり、逆に南イタリアの nd > nn 現象が Grosseto - Ancona ラインまで北上するといったこともしばしばみられる。

方言分布を大まかに抽象すると、イタリアは以上のように大きく三つの方言区画に分かれる。この際 C. Merlo のようにサルジニア語は南イタリア方言との接近にもかかわらず、その著しいラテン語性をもって、またラディン語は北イタリア方言との接近にもかかわらず、その独立性をもって、またコルシカ方言はトスカーナ方言との関連にもかかわらずイタリア領外であることからここでは便宜的にこの三つの方言区画の外に置くこととする。三つの区画はさらに次のように下位分割される。

- 1) 北イタリア方言: I. リグリア方言, II. ピエモンテ方言, III. ロンバルディア方言, IV. エミリア方言, V. ヴェネト方言。
- 2) トスカーナ方言: I. フィレンツェ方言, II. シェナ方言, III. 西トスカーナ方言。
- 3) 中・南イタリア方言: (中部) I. マルケ方言, II. ウンブリア方言, III. 北ラツィオ方言。(南部) I. ナポリ方言タイプ(南ラツィオ, アブルッツィ, カンパーニア, ルカーニア, プーリア), II. シチリア方言タイプ(サレント, カラブリア, シチリア)

当然のことながらこのような方言下位区分に明瞭な境界線があるわけではない。等語線は束をなすよりも現象ごとに異なる広がりを示す方がむしろ普通である。地域差がもっとも顕著に現われるのはやはり音のレベルにおいてである。語彙や統辞のレベルになるほどその度合は低く、形態のレベルではさらに少なくなる。したがってここでは音の現象(と呼ぶのは地域ごとの音体系の記述は目下部分的にしか完成していないからである)を規準に、すなわち等語線のうちの等語線に注目しながら、諸方言の有標的特徴をトスカーナ方言からの偏差という観点から眺めてみたい。

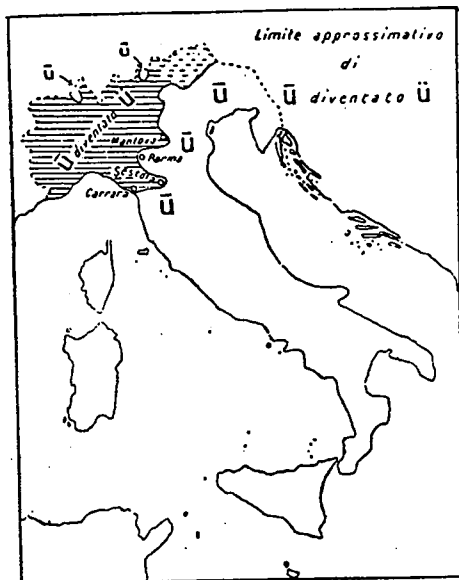
北イタリア方言全般については、これははじめからガロ・イタリア方言とヴェネト方言とに2分する方法もあるが、中・南およびトスカーナ方言から区別される主要特徴はこれら両

グループに共通する特徴ともなっているのでその必要はない。C. Merlo, G. Berton, C. Tagliavini, G. B. Pellegrini などこの方法をとっている。主要特徴は、重子音の単子音化と母音間の無声閉鎖音の有声化である。

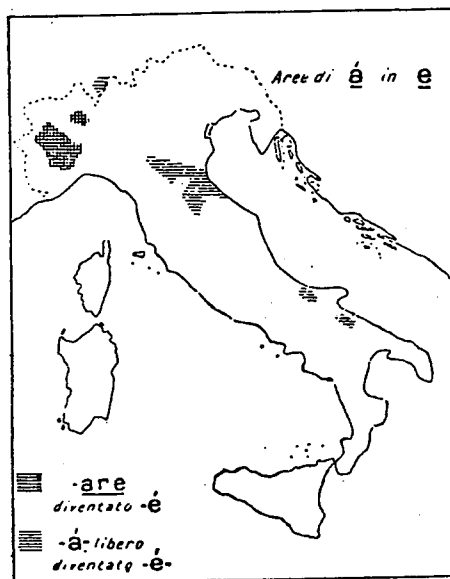
重子音の単子音化：《cavallo》馬ピエモンテ, ロンバルディア, エミリア kavál ヲ
 ヲネツィア kaval; 同様に《anno》(年) an, ano; 母音間の無声閉鎖音の有声化
 (弱化的)：《amica》(女友達) リグリア amiga, ピエモンテ amija; cl-, gl- >
 č- ġ-：《chiamare < clamare》(呼ぶ) ピエモンテ čamé, リグリア čamá, エミ
 リア čamér, ヲネツィア čamár; 《ghiaccia < glacia》(氷) ピエモンテ ġasa,
 リグリア ġasa, ロンバルディア・エミリア ġatz, ヲネツィア ġaso.

ことにピエモンテ方言の特徴をなす子音連結 ct > it: Fait 《fatto < factu》(な
 された), lait 《latte < lacte》(牛乳)は, ロンバルディア方言では ct > č: fač,
 lač である。

母音に関しては, u (<ū>) > ü がフランコ・プロヴァンサル地域に接触して図のように
 リグリア, ピエモンテ, ロンバルディア, 西エミリアにわたってみられる。



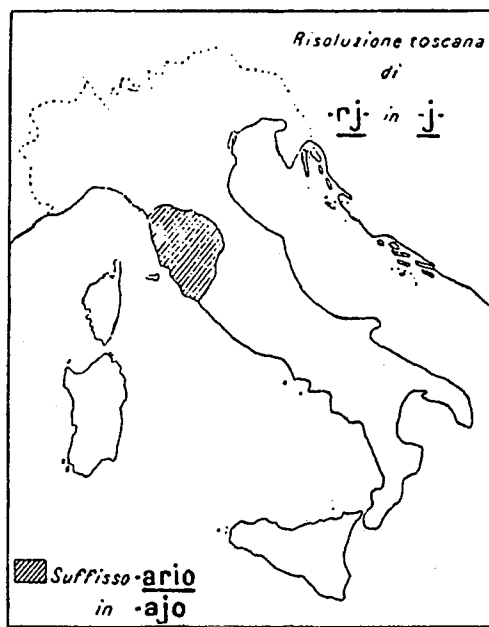
(G. Bertoni, *profilo*, P. 45より)



(G. Bertoni, *profilo*, P. 46より)

mül 《mulo》らば, fūma 《fuma》喫煙する, fortūna 《fortuna》運命。-áre
 に終わる不定詞における -á > -é 現象がピエモンテ方言に, また á > é 現象は図のように
 北イタリアと中部イタリアとの一部にみられる。p.es. andé 《andare》行く, canté
 《cantare》歌う; ポローニア leg 《lago》湖, kęvra 《capra》山羊, sál 《sa-
 le》塩, kampena 《campana》鐘。ヴェネト方言は母音組織において他の北イタリア
 方言から区別される。それは u の口蓋化が存在しないことである。子音組織に関しては他の
 北イタリア諸方言と共通性を保っている。p.es. t > d >ゼロ ヲネツィア kaéna
 《catena》鎖; b > v >ゼロ ヲネツィア laorár 《lavorare》働く。

次にトスカーナ方言は、その保守性とそのなかでフィレンツェ方言はイタリアの文学語の、そして標準語の基盤となったことでイタリア方言のなかでもっとも重要性をもつものである。一般的な特徴として上げられるのが、 $rj > j$ 現象である。これに対して北および中・南方言



(G. Bertoni, *profilo*, P. 80 より)

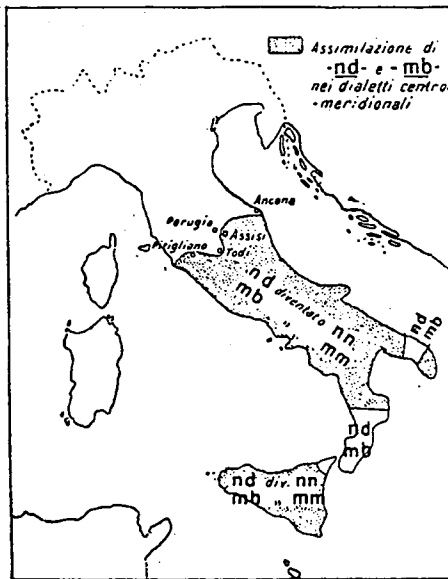
は $rj > r$ である。area $>$ aia 地域 (トスカーナ以外では aro); -arius $>$ aio (トスカーナ以外では aro)。p. es. notaio 公証人 (トスカーナ以外 notaro) フィレンツェ方言を特徴づけるのは、母音間の -k- の摩擦音化 (喉音と呼ばれる) である。p. es. la hasa \ll la casa \gg その家。さらに -p-, -t- についても、それぞれ rifa \ll ripa \gg (岸), amaho \ll amato \gg (愛された) のように同様の現象がフィレンツェ方言よりも広範囲にみられる。なお西トスカーナにおける破擦音 $tʃ, dʒ >$ 摩擦音 $ʃ, ʒ$ も見逃せない。p. es. pece [pé:fe] 樹脂 (cfr. pesce [pé:ffe] 魚), la gente [la ʒénte] 人びと。本来のフィレンツェ方言に過ぎないが、標準語に発展したものに口蓋音または $n+$ 軟口蓋音の前で $e (< \check{i})$, $o (< \check{u})$ の代

りに、それぞれ i, u がみられる。p. es. famiglia 家族, lingua 言語, dunque したがって (その他のトスカーナ方言ではそれぞれ fameglia, lengua, dunque)。トスカーナ方言について触れておくべきことに、北および中・南方言にみられるメタフォニーの欠如があることも付け加えておきたい。

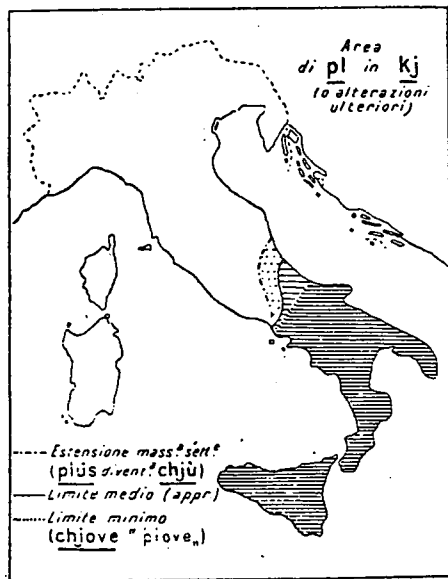
中・南イタリア方言に共通する特徴は、まず第一に -nd- $>$ -nn-, -mb- $>$ -mm- 同化現象である。図のような分布を示している。p. es. monno \ll mondo \gg 世界, gamma \ll gamba \gg 脚, sammuco \ll sambuco \gg にわとこ, gonnola \ll gondola \gg ゴンドラ。

次に図のようにやはりかなりの範囲にわたってみられるのが、 $pl > kj$ である。p. es. chiu \ll più \ll plus \gg もっと, chianta \ll pianta \ll planta \gg 植物, chiovere \ll piovere \ll plover \gg 雨が降る。

さて中・南イタリア方言の下位区分への規準となるのが、アクセントのない語末母音組織である。これによって三つのグループに分けられる。まず中イタリア方言では (トスカーナ方言における $\check{u}, \check{o} > g$ に対して) $\check{u} > u$, $\check{o} > o$ である。otto \ll otto \ll octo \gg 8, acitu \ll aceto \ll acetum \gg 酢。南イタリア方言 (ナポリ方言タイプ) は、南ラツィオからアブルッツィ, カンパーニア, ルカーニア, プーリアにわたり、アクセントのない語末母音を (a を除いて) 曖昧母音 θ に弱める現象をもつ。p. es. ナポリ can θ \ll cane, cani \gg 犬, fasul θ \ll fagioli \gg 隠元豆。南イタリア方言 (シチリア方言タイプ) ではアクセントのない語末母音は i, a, u の3種類に還元される。p. es. cantari \ll cantare \gg 歌う。latte \ll latte \gg 牛乳, ottu \ll otto \gg 8, vendu \ll vendo \gg 売る。luna \ll luna \gg 月。

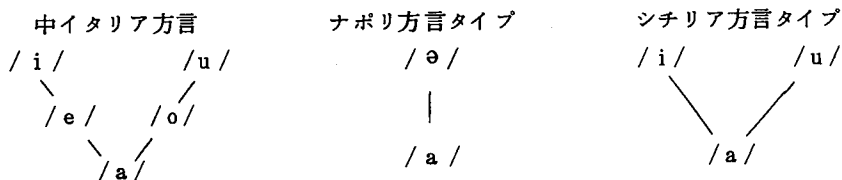


(G. Bertoni, *profilo*, P. 57より)



(G. Bertoni, *profilo*, P. 58より)

stilla ≪ stella ≫ 星。中・南イタリア方言のアクセントのない語末母音体系は次のように示すことができる。



なお、参考までにトスカーナ方言ではアクセントのない語末母音は /i/、/e/、/a/、/o/ の 4 個である。

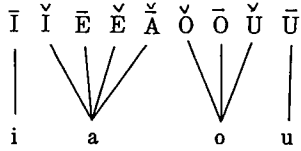
次に中・南イタリア方言に普及している重要な現象にメタフォニーがある。メタフォニーを起こすアクセントのない語末母音は \bar{i} と \bar{u} に由来する。カンパーニャ方言を例にすると、これらの母音は先行の e または o をそれぞれ i または u へとせばめ、先行の e または o をそれぞれ ie または uo に変える。p.es. nire ≪ nero, neri ≫ (黒い) < nigr̄um, nigr̄ī (cfr. ner̄e < nigr̄am, nigr̄ae); russ̄e ≪ rosso, rossi ≫ (赤い) < r̄uss̄um, r̄uss̄ī; biell̄e ≪ bello, belli ≫ (美しい) < b̄ell̄um, b̄ell̄ī; buon̄e ≪ buono, buoni ≫ (よい) < b̄onn̄um, b̄onn̄ī。このように男性形に生じ、女性形にみられないことから、単複同形のまま、男性と女性形との対立が生じていることに注目したい。

この種のメタフォニーは、北イタリア方言(ただしアクセントのない語末母音は \bar{i} に限られ、そのため男性・複数形の場合に起こる)にもみられるが、すでに述べたようにトスカーナ方言にはみられない現象である。

南イタリアに関して、さいごにアクセントのある母音組織を眺めると、次のような特異な

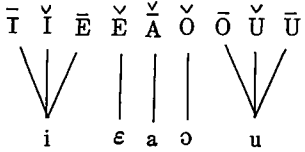
例が見出される。

アブルッツィ・マルケ方言



p.es. masθ << mese < mēnsēm >> 月,

シチリア方言



p.es. tila << tela < tēlām >> 布,
vuci << voce < vōcēm >> 声,

なお南イタリアには、さらに文法レベルでも特有の現象がみられ、そのなかでも所有形容詞の後置(ただしシチリアの大部分は標準語と同様に前置タイプ)と近過去が(ことにシチリア、カラブリアでは)存在しないことがあげられる。p.es.マルケ *maritumu* << mio marito >> 私の夫、アブルッツィ *padrēmθ* << mio padre >> 私の父、カラブリア *sworma* << mia sorella >> 私の妹。

4. 方言分布の背景に関連して

方言分化を生ずることとなった要因として第一に考えられるのが人種的基層である。ラテン語が普及した大部分の地域においては、征服者の言語が基層言語を駆逐して語彙のレベル



(G. Bertoni, *profilo*, P.12より)

にその痕跡を僅かに留めることがあっても、一般にその影響が問題となるのは、音のレベルにおいてである。しかもラテン語と基層語との混交が十分に認められる地域とそうでない地域とがある。前ローマ時代の基層は図に示すような分布であったことが知られているが、混交の比較的強いのはガロ・イタリア、ウンブリア、イタリック地域であり、その逆はトスカーナ、ヴェネツィアのほか、サルジニア、サレントなどの地域である。ガロ・イタリア地域、すなわちポー川流域の西側においてはケルト要素が著しく、 $u > \ddot{u}$ 現象はそのひとつとされる。語彙にも若干ロンバルディアの *magiustra* << fragola >> (イチゴ) のような例がある。フィレンツェの喉音は議論を含みながらもエトルスク要素に帰せられる可能性は大きい。ルカーニアにおける

-b->-f 現象(es. attrufu <<ottobre>> 10月) はオスク語に帰せられている。

これに反して傍層語は、後の段階でイタリア語を変容するが、一般には語彙のレベルに留まるにすぎない。barbiere (床屋), pensiero (思想)などにみられる-iere, -iero のようなガリシズム, albergo (旅館) <haribergo, guerra (戦争) <werra などゴート, ロンゴバルドに由来するゲルマン語の流入がある。ノルマンの影響は、地域的分布を示してシチリア(南カラブリア)に留まるものが多い。p.es. forgiaru <<fabbro>> (鍛冶屋) <forgia <forge, giugniettu <<luglio>> (7月) <juignet, racina <<uva>> (ぶどう) <raisin, quattu vintini <<ottanta>> (80)。

さて方言区画は、いうまでもなく言語地理学的調査に支えられているものである。事実イタリア諸方言の3区分はすでに触れたような等語線の束の存在に負っている。しかしながら下位区分のためには、等語線が行政上の区画と必ずしも対応しないのはもちろん、現象ごとの分布(地域的広がり)の複雑さは、強いて便宜的な判断に頼らざるをえない。言語地理学の目標が、結果的に方言区分への貢献につながるとしても、本来(伝統的に)は個々の事項(現象)の歴史的発展の跡を辿ることにあつたことを考慮すれば当然でもある。この意味で方言区分は静的で絶対的な存在ではありえない。諸方言は音声変化の結果のみから生じたものでないばかりか、方言間の影響にもよることを無視することはできない。すなわち方言の発達とは改新と呼ばれる現象によって狂わせられる。改新は文化的あるいは政治的優位により中心から放射状に拡大していく。イタリアではトスカーナ語が、高貴なる民衆語に高められるとともにこの地位を確保した。ヴェネト地域への影響はことに大きく、たとえばヴェネツィアではこんにちavrilではなくapril(4月)が、また語彙においても北イタリア的なcruscaの代りにsemola(ぬか)が用いられる。逆に強大なミラノを中心とするロンバルディア地域への影響は北イタリアでもっとも弱く、「頭」を意味するtestaが及ばず、いぜんco <caputが用いられるのはその1例である。むしろトスカーナにおいてamico(友達), pecora(羊)と同時にago(針), lago(湖)などが存在するのは、ロンバルディアからの影響によるものである。トスカーナ語性は南方へも拡張し、ローマ方言が南イタリア方言タイプのtiempo, cuorpoに代ってtempo(時間), corpo(体)を用いるのはlingua toscana in bocca romana(トスカーナ語のローマ訛り)と呼ばれたようにトスカーナの影響に由来する。シチリア、南カラブリアにおいてcapoでなく、testa(頭)が用いられるのは北イタリアからの影響である。-nd>nn現象が南カラブリアからメッシーナ地域にかけて存在しないのは、この地区は中世までギリシャ語が話されていたため孤立地帯をなしており、いわゆるローマ化は古代におけるものではなく、新しい時代に属すること、すなわちトスカーナ語を抵抗なく受入れたことから理解される。ビザンチン、サラセンの支配をうけてラテン語性を弱められたシチリアに関しても同様のことがいえ、この意味でシチリア方言は南イタリアのなかでもっとも非南イタリア的方言となっている。

2千年間を通じてイタリアの地は、さまざまな要因により複雑な方言分化を呈することになったが、こんにち国語対方言という未解決の言語問題をいぜんかかえながらも全体としてDuecento以後はそれまでの遠心力に対してダンテにより固められた内心力が優勢となり、こんにちにたちいたったということができよう。

5. 新しい言語問題

さいごに方言との関連においてイタリアの言語事情に触れてみたい。実際にイタリア人のなかに一方に方言しか使用しない人たちが存在し、他方にいわゆるイタリア語(国語)しか使用しない人たちがあって、その中間に場面によってこの両者を使い分ける人たち、たとえば仲間同志は方言によるが、見知らぬ人(外国人も含めて)に対してはイタリア語に切り替える人たちの三つのグループがあることが指摘されている。ある推定によれば文盲(一般に方言のみ使用と考えられる)は1861年にはイタリア全人口の75パーセントであったが、100年後の1961年には8.4パーセントになったといわれる。De Mauroによれば、1951年にはイタリア人の18.5パーセントが国語のみを使用し、方言しか使用できないものは13パーセント、したがって87パーセントは国語の使用が可能であったが、にもかかわらずほとんどの場面で通例方言を使用するものが63.5パーセントにも達したとされている。学校教育の普及、マス・メディアの発達からの了想に反してイタリア方言の根強さが伺える統計である。

このように地域主義の根強いイタリアにおいて、共通語はともかく、そのさらに洗練された、理想的ともいうべき標準語などおおよそ非現実的な存在となりやすい。共通語または標準語としての国語(*italiano comune*)と地方方言(*dialetto locale*)との間に、国語の地域変種ともいうべき地域イタリア語(*italiano regionale*)の存在が指摘されるようになったのはこのような事情からである。さらに場合によっては地方方言の地域イタリア語寄りの変種として地域方言(*dialetto regionale*)を加え、広義のイタリア語に合計四つの階層を設定することが提案されている。G. C. Lepschy の提供する実例を示すと、国語における《*Andate a casa, ragazzi.*》〔*andáte a kkása ragáttsi*〕(君たち、うちへ帰たまえ)なる文が、ヴェネツィアの地方方言では、〔*ve káza túzi*〕、また同時に同じ村でより地域性の大きい〔*nde káza tosi*〕も聞かれ、さらに地域イタリア語としての〔*andáte a kása ragási*〕 (標準語のヴェネツィア訛り)として現われる。*ragazzo* か *toso* かの選択が国語と方言との選択に対応し、*toso* にもとづく方言についてはその発音の違い、すなわち *tuzi* と *tozi* が完全な地方方言と地域方言とを区別する。*ragazzi* にもとづく国語については、標準語型の発音と2重子音を欠く方言型の *ragasi* とが区別されるというのである。

こんにちしばしば論点となる、この地域イタリア語は、伝統的な2分法、国語対方言というテーマの20世紀における国語と方言との歩み寄りという形式のひとつの解決といえよう。

参照文献

- G. I. Ascoli, *L'Italia dialettale*, in 《*Archivio glottologico italiano*, VIII (1882)》
G. Bertoni, *Profilo linguistico d'Italia*, Modena, 1940.
G. Devoto, *Profilo di storia linguistica italiana*, Firenze, 1954.
G. Devoto-G. Giacomelli, *I dialetti delle regioni d'Italia*, Firenze, 1972.
G. Devoto, *Il linguaggio d'Italia*, Milano, 1974.
K. Jaberg-J. Jud, *Sprach- und Sachatlas italiens und der Südschweiz*,

zofingen, 1928-1940.

T. De Mauro, Storia linguistica dell'Italia unita, Bari, 1972³.

A. L. Lepschy-G. Lepschy, The Italian Language, London, 1977.

C. Merlo, L'Italia dialettale, in «L'Italia dialettale, I (1924)».

G. B. Pellegrini, Carta dei Dialetti d'Italia, Pisa, 1977.

G. Rohlfs, Grammatica storica della lingua italiana e dei suoi dialetti, Torino, 1966-69.

G. Rohlfs, Studi e ricerche su lingua e dialetti d'Italia, Firenze, 1972.

C. Tagliavini, Le origini delle lingue neolatine, Bologna, 1969⁵.

P. Tekavčić, Grammatica storica dell'italiano, Bologna, 1972.